

昭和四十二年度

春季公開講演会要旨

創造力の心理

京都大学教授 園 原 太 郎

知能は、心理学上最もよく研究されて来たものの一つであるが、最近それについての考え方を改める必要を感じるようになった。と共に、従来の知能観が見落しがちであった創造的要因が強調されるようになった。しかし、これまでなかったものを慣習に捉われず作り出すような発展的な働きを客観的に把握するには、心理学の方法論上大きな困難がある。創造性の研究が多く歴史上の偉人の生涯を材料とするのは、この困難のためである。創造力の過程を、現存する人の現実的活動そのものにおいて究明したいと言う心理学上当然な要請が胎むこの困難に挑戦せるもののうち、特に注目すべきはマッキノン、パロン、ホルラ、パークレーのカリフォルニア大学人性研究所 Institute of Personality Assessment における十年來の試みである。

彼らは、現在アメリカで活躍している最も独創的、創造的とランクされた建築家数十名の協力を得てこれに各種の心理学的テストを行なうことができた。この選択は、建築家に要請される創造性は、創造活動の二面——すなわち芸術家に見られるよ

うに実際的要求に妥協することなく自己の内的活動としてのイメージを表現対象化することによって現実規定を包容するものと、実験科学者、技術者などの如く、現実的規定の中に新らしい可能性を発見することによって現実の新しい再構成をもたらし得るもの——を兼備していると考えられたためである。彼らの研究は勿論これら建築家のみに限られず、科学者、文筆家などにも及んでいるが、その顕著な帰結の一つは、物を認知する場合、また物の好悪を表明する場合、創造的な人は普通人のようには簡単な秩序で割り切らず、均斉のとれたプロポーションやシンメトリーなどでは満足しないという事実であった。

例えば色紙で模様を作る場合、普通人の並べ方は、そのルールがすぐ分るようなものであり、十五分乃至二十分の短時間で終るのを常とする。しかるに創造的人物は一応はそれをやつても決して満足せず何度もやり直し、次第に構成が複雑になりその構成原理が他人には見分けられないものになる。一見雑然としているが、しかしリズム感のあるまとまりを示す。その上何時間も人がとめるまでやめない。ロールシャハ・テストでも、同じく平凡反応にとどまらず多様な認知をなし、部分反応でない全体を統一する独創反応を現わす。ワルテグテストでも初めに与えられたモチーフとしての線の構成を、新らしい全体の別の別の単位部分となるまでに崩して、複雑な造形を行なう。

また線画を並べて選べると、創造的と言われる人ほど不規則な非相称的なものを取る。彼らはまた写真画よりも印象派のものや抽象画を好む。新しい絵画の手法が常套的なものに対する挑戦を表現しているとすれば、これは創造力の源泉が奈辺にあ

るかを語るものではなからうか。

このことは、創造的人物が殊更、ごたごたしたものを好むという意味ではない。彼らは、混沌の中に新しい秩序を求めているのである。彼らが求めるのは、単なる秩序でも単なる混沌でもない。混沌の中に新しいアスペクトを発見することによって、現実を再構成して行かうとするのである。すなわち、複雑なものに対する寛容と忍耐力こそ、創造的人格を特徴づける顕著な心理的指標であると言いうことが出来る。常識的秩序に満足しなければ、当然そこに生ずる曖昧や混乱を受容しそれに耐えて、そこから新しいパターンを見出そうとする耐久力がなければならぬからである。新しい現実とは心理的不安をよび起こし、心理的動揺がある時は人は習慣的なものに返ろうとする。しかし真剣に現実に向き合えば、それだけそれまでの習慣的行動では解決出来ない面を見出す。これが現実に関心を開くのである。現実に関心をむけず立ち向うか、それとも常識や空想に目をそらすか。

創造的人物の興味は、範囲が広い。興味テストや態度テストは、彼らが、男らしさ・女らしさと言う性的区別を強調する興味の社会的通念から自由であることを、教える。彼らは、通常異性が関心すべきものと考えられているものに興味をもつことによって、社会的偏見にしばられない普遍的関心と個性的判断の所在を明らかにする。一方で慣習の確定性と、他方で現実の不確定性と闘う、矛盾に対する強い忍耐力が、独創力の本質をなすもののように見受けられる。

この点で、近時知能の量的計測が、その一面性を疑われるに

至っていることは、注目に価する。この不信は、知能指数と、実際場面における知的活動の成果との間に、平行がないと言う実験的所見に基づく。知能指数と学業成績との相関は普通高いと期待されている。なる程両者の間にプラスの相関はあるのであるが、しかし学業成績の変動を説明しうる知能指数の寄与は僅かに四分の一にすぎないのである。従って未来の予測は、知能指数からするよりも、現在の達成度からする方が、遙かに高い近似性をもつ。知能検査が測る知能と、実生活において働く知能とは明らかに異なる。知能検査は、知能活動のある面を捉えているには相異ないが、想像力・自発性・独創性の面を無視しているのである。

知能検査では、問題が試験者によって予め選ばれているけれども、実生活では、被験者すなわち生活者自身が問題を選ばねばならない。精神薄弱児や幼少児でも、適当な条件さえ与えられれば、普通児や年長児とはほぼ同じ作業成績に達することができる。実験室における解決ずみの問題と、未解決の実際問題との差が、ここにある。他方、テストは短時間になされるが、実生活の問題の解決は長時間を要する。問題を自ら選び、それに耐えて行く能力、云いかえれば困難な事態との格闘を長く持続させる能力を要する。

ところでこの能力は、かかる努力が気分的に不愉快でないかどうか、その心理的緊張に耐えられるかどうかという情緒的問題に、密接に関連する。従って情緒的な要因の介入を極力排除している抽象的な実験室以外の場面では、動機づけや態度が重要になるであらう。

知能指数の高低と実際の活動能力の高低とは、十分に対応しない。十年間の追跡調査は、知能指数が漸次上る傾向の人と、漸次下る傾向の人とがあることを教える。十五以上変化したもののについての情動性のテスト結果は、上昇群は性格的に独立心が強く、競争を不快としないこと。下降群は依存心が強く、競争を避けようとすることを示した。知能が実際の場で活動的になり、知能指数が現実の成績の中に実現されるためには、目的に対する強い欲求、好奇心や能動性を必要とする。カリフォルニア大学のテストが教えるものは、創造活動において強力なのは、才能そのものよりも、困難な事態そのものに耐え、むしろそれを喜ぶ情緒的傾向であることである。

この点において、心理学は大きな誤謬を犯して来た。われわれは何故動くのか、じつとしていれば素なのに——という問題は、活動を平静回復の過程と見做すことによって、解決されて来た。何かするには欠乏状態が必要であり、欠乏から生ずる欲求に伴う動因刺激が活動を促し、活動によって欲求が満たされれば動因刺激が減退して強化効果をもつ。これが、従来支配的であった欲求低減説である。この仮説はしかし、平静が最善の状態であるとする前提の上に成立する。それは下等動物の行動の説明としては妥当するかもしれない。そこには欠乏と充足、欲求と満足の循環のみあって発展がないからである。ところが高等動物では、かかる平静至上説をくつがえすような例が少なくない。抵抗や刺激を好んで求め、ある刺激が満たされると、別のより困難な刺激を求めて行動する。刺激が全くなくなると、却って神経症的反応が現われる。強い好奇心や探究心はかかる

心理を前提としなければ考えられない。知能の水準が同じであっても、これを高め或いは低める力が、知能以外のところで働く。好奇心や探究心が高める力であるとすれば、安易な満足感や逃避は逆の機能を果す。困難に面して、人は知的に対処する。それが出来ない、それはつまらんことだという感情的補償をし、価値の転換をはかる(防衛機制)。これは人間心理の自然であるから、これに耐えて行く人こそ偉大であり創造的なのである。

先のカリフォルニア大学の報告によれば、独創的人物の今一つの特徴は、彼らが大変な自信家であることである。自信家とは、容易に集団の圧力に屈しない強い自我の持主という意味である。集団の規準に同調し易いのは人間自然の心理であって、集団テストにおいてサクラを使うと、自己の判断を、その正しさが明白な場合にさえ、放棄する傾向がある。しかし創造的な人は容易にかかるトリックにかからず、多数者の信念や権威者の意見に同じない判断の強い独立性を示す。自分の関係しているものの価値に強く執着し、同調性への抵抗が強い時には性格異常の観さえ呈する。一般に創造的な人々の性格像は調和的で寛容であることが多いが、時には性格テストにおける異常指数が高く、精神病質的傾向が見られる場合もある。しかしその場合でも精神異常者と異なる点はその性格的強さである。すなわち、自己の強さ(strength of ego)を持つのである。一般の集団では異常傾向と自己の強さとは負の相関にあり、殊に精神異常者では、後者が極めて低いのに對し、創造的なひとびとは自分自身に対しても強く取組みうる力の源泉をもっているの

である。かくて創造力の源泉は、外に対しても内に對しても困難な事態に對する強い耐忍力であり、常により困難な問題解決を志向する根強い追求力であると云うことができよう。

しかし人間での創造的活動は、無からの創造ではありえない。古いシステムの基盤なくしては新しく作り出すことも出来ない。新しい知識や形式を生むとは、無かつたものを作り出すと言うよりは、新しい価値、新しいシステムを作り出し、新しい關係を見出してそれにより高い価値をおくことである。常識や習慣は創造の母胎であるといわねばならない。従来知能と呼んだものは新しい事態に直面したときの主として常識や習慣に基づく再生的思考を指したのであった。知能検査は特定の学習を伴わないで遂行される問題解決の能力を前提とするのであるが、これは平均的な生育状況において習得されてきた思考習慣に他ならないといえよう。それは、誰もが疑わないことをどこまで理解しうるか、又その思考法を他の状況にどこまで適用しうるかを調べることである。換言すれば何が正しい答えかを導き出す思考力の高さであり、それは思考の形態としては多くの前提から唯一の結論を誘導するプロセスである。思考においてこのプロセスの重要なことは論を俟たぬであらう。それは洗練されて *alogistic* な論理操作となり、*well-defined* な概念による科学的思考にも発展する思考の重要な一つの基本形態である。知能検査は、このことを意識して取入れたのではなかったのであるが、実用的な見地から經驗的に構成されて来た結果に於いて、自然と思考のこの面がその内容となってきたのであるといえよう。何故そうなつて来たかについては説明を省略す

るが、知的水準をその達成度で測定するという前提の中にその因が存するのであり、しかも学校教育その他特別の思考訓練による知識とは別の次元においてこれを捉えようとした所から、常識的思考における正答の誘導が知能を代表する位置を占めるに至つたと考えられる。その場合正しい答えとは既定の論理的証明や經驗的明証に基づき社会的通念として多数者の信念となつており、特別の思考的訓練を経ない限り、その前提や正答の正答性は真としてうけいられ、これに對する思考的承認が知能水準を決定するものと考えられたのである。ここに慣用の知能検査による知能概念が思考の收斂的側面(多くの前提からの唯一の帰結、多数者の信念への收斂)という重要な因子の浮彫りに成功したに拘らず一つの限界をも必然的に内包する結果となつた因がある。従来の知能は、創造がそこから出発する習慣的思考の達成度を規定するが、創造そのものではない。極端ないい方が許されるなら、正しいとされていることを正しいと考える思考法であるから、先生の教えたことを正しく理解する子供が知能の高い子ということになる。知能検査は、既成の与えられた知識を理解する能力を驗するものであり、そこから新しいものを作り出す能力を予測することには直接關係しない。そこでは習慣的思考様式に従つて、既定の前提から既定の結論が導かれることだけが評価される。しかし新しく知識を構成して行く能力を養成することが教育の目的だとすれば、教師の言に容易に納得しない生徒こそ教育の希望であるとも言えよう。既成のものに縛られた思考操作と逆の思考操作があつてよい。すなわち一つの前提から多くの結論を導き出し、既定の關係を様々

に変化させて多様な可能性を引き出す働きである。

例えばコップの概念は、水を飲むという通念上の用途に限定される。即ち定義される。コップについてのわれわれの行動、思考はこの定義を前提として是認されるのである。しかしコップは他のことにも多く使われうる筈であり、事情によっては容器としてのコップの既成概念に捉われない使用法が却って時宜に合う場合もある。行動や知識は、ものや観念の関係についての複雑なシステムである。そしてこのシステムを作ってゆくのは他ならぬ人間自身なのである。だから新しいものをつくるということは、物の新しいありかた、新しい価値の発見による新しい関係づけ(システム)に他ならないといえる。既成の観点・既成の考えかたでは同じだとみられていることが本質的に違うこと、違うと思っていたことが相通すること、そういう関係づけ、再秩序化が基本となっている。従来知能検査ではこの面が必ずしも十分に重視されてはいなかった。ロスアンジェルス南カルフォルニア大学のギルフォート(J. P. Guilford)が高級知能に関する精密な分析の結果、彼が拡散的思考(divergent thinking)と呼んだ思考操作軸を明確に指摘したことは、この点で極めて重要な業績だったといわなければならない。問題の受け取り方が非常に新鮮で柔軟であつて、既定の関係を多様に変化させて色々な可能性を見出していく知的操作は、思考において新しい発想、新しい側面を発見する過程では、きわめて重要な役割を果している。問題解決場面ではこの二つの方面的知的操作は相互にからみ合い補足しあつて、問題事態を解決事態へと構造変換するのであるが、習

慣的定式の新しい組換えや、既定概念の中心転換を必要とする能産的創造的思考では、特にその孵卵期、開明期といわれた思考段階においては、拡散的方向への思考操作の重要性は決定的であるといえよう。しかしこの思考形態は従来の教育や知能検査においてこそ比較的埋没されていたとはいへ、必ずしも特異な思考能力に依存するとはいえない。言語におけるシンボリゼーションにも既にその重要な機能として見出せるものである。言語のシンボリゼーションは記号の記号というような意味で現実的事物や事件及びその関係の代表的代理性において普通考えられるけれども、寧ろシンボリゼーションの重要な機能は、そうした歴史的社会的なシンボルによって、不明確、不確定な経験を表現的に規定し、そこに新しい現実構成をする点にあると考えられる。ことばを学ぶのは収斂的方面であるが、それによつて最も適切に現実構成をする面は拡散的でありシンボリゼーションの本質である。ひとが言語を用いる限り且つ有効にそれを用いる限り、拡散的発見的操作は常に内在していると考えねばならない。ただこの操作は、いわば思いつくままに勝手な発想をし空想をするのにも似たものであるから、直面する事態が重要でなく又一時的散発的には楽しいものであるかもしれないが、習慣的な常識や常套に依拠する心理的安定をすてて新しい現実構成に向つて長期的に持続することは極めて辛いことである。アインシュタインは、自分は難問の解決に當つて明確な概念や論理に結晶するまでにいつも何か組み立てたり壊したりすることのできる漠然たるイメージをとっていると語つたが、ああでもないこうでもないと考えを反転させる苦しき

に耐え続けないと、ヒントにぶつからない。常人はこの長い持続に堪えられないのである。しかもヒントにぶつかったらあと、それが現実化するためには洗練された取極的な論理的な操作が必要であり、ここにもその複雑さへこたれない強い追求力が必要。

結局 創造的活動を行なう人の性格的特性にみられる、曖昧さや複雑さへの耐忍性、不同調性、自主性は、新しい現実構成（それを創造的活動とすれば）を実現するための多種多様な思考活動に耐える能力を示すものであると言える。しかもこの能力は特別な才能というよりは、小児にもみられる人間の基本的活動の一つであるが、ひとはそれを長く保持、持続し得ず安易な常識的枠組の中にもどり易いのである。ひとに内在するこの創造的活動の発展を阻害するものは、人格的要因というよりはむしろ社会的歴史的要因に基づくとみらるべきであろう。従って、発展的で柔軟な人格や思考の展開を望むならば、そのような阻害要因が那邊にあるかの究明こそ望ましいものであろう。論述中一々論拠の出典やデータを示さなかったが、心理学の研究分野における多くのデータを基礎として論じたことを附言しておく。

鬼貫に於ける「まこと」の宗教的性格

大谷大学教授 山 本 唯 一

鬼貫（一六六一—一七三八）は著名な元禄俳人の一人である。彼が「まことの外に俳諧なし」（独言）といったことはよく知られている。元禄俳諧は「火をも水にいひなすなり」（奥儀抄）といわれている。たとえば「五月雨五か余魚やおよぐ古草履 弥平」（江戸弁慶）という。これは古草履を王余魚にいいなしているのである。すなわち巧みに嘘をついている。こういう俳諧観が根強かったとき鬼貫はまことこそ俳諧の本領であると主張した。これは俳諧文学史上劃期的なことであったといわねばならぬ。鬼貫のまことについては幾多のすぐれた論考が発表されている。が「まこと」の本義が解明されているとはいえない。そこでいまはまことの諸要素を検討しつつ、その本質が宗教的眞実をさすものであることを指摘したい。

鬼貫のまこと説は俳諧に関する論であり文学論である。そういう面からそれを見るべきことはいうまでもない。その観点からするときまことは素直な写実を基調とするものといつてよからう。「鶯はうぐひす、蛙はかはづと聞ゆるこそをのれ／＼が歌なるべけれ。うぐひすに蛙の声なく、かはづにうぐひすの囀りなきこそまことには侍れ」（独言）という。が鬼貫のまこと